

川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果（第2報）

橋本 美香¹, 山口 恒夫¹, 兵藤 文則²

The Results of the Japanese Placement Test at Kawasaki College of Allied Health Professions (II)

Mika HASHIMOTO¹, Tsuneo YAMAGUCHI¹ and Fuminori HYODOH²

キーワード: 日本語プレースメントテスト, 語彙, 導入教育

概 要

本稿は、川崎医療短期大学において2009年度に新入生に対して実施した「日本語プレースメントテスト」の実施結果を報告することを目的とする。

前回の報告では、川崎医療短期大学で2007年度、2008年度に実施した「日本語プレースメント」の結果から、「日本語プレースメントテスト」の必要性、国語力低下の問題点について示した。本稿で取り上げる2009年度に実施した「日本語プレースメントテスト」の結果から、中学生レベルの語彙力しかない新入生が25%在籍していることが分かった。この背景には、ゆとり教育の弊害、読書量の低下、パソコンやインターネットの利用頻度の増大などがあると考えられる。そのため、導入教育として語彙力の向上を図る必要があり、その方策として語彙力を養う学習環境を整えた上で、継続した教育の必要性について確認できた。

1. はじめに

川崎医療短期大学では、2007年度から新入生の語彙力を測定するために「日本語プレースメントテスト」を実施している¹⁾。「日本語プレースメントテスト」は、2007年度は全国で54大学約29,000人に実施されている日本語の語彙力を測定するための到達度測定テストである。テスト内容は、高校3年生までに学習する語彙を基につくられており、社会生活を営む上で必要とされる語彙を十分に身につけられているかどうかを測るものである。社会人基礎力が低下している現在にあって、このような語彙を身につけていることは非常に重要であると考えられる。

今回の報告では、2009年度の新入生の「日本語プレースメントテスト」の実施結果を示し川崎医療短期大学における導入教育の方向性を検討していくことにする。

2. 「日本語プレースメントテスト」について

1) 調査対象

2009年度入学生375名について、2009年4月に「日本語プレースメント」テストを実施した。

2) 「日本語プレースメントテスト」実施方法

問題数は60問であり、45分間で行われる漢字の意味・語句の意味・語句の用法などについて問われている。問題はすべて4択問題となっており、マークシート式記述である。解答結果について、ジャンル別の正答率は示されず、スコアと中学1年生から高校3年生のレベルでのみ結果が示される。

3. 2009年度入学生の「日本語プレースメントテスト」実施結果

まず、2009年度入学生の入学時の「日本語プレースメントテスト」結果を表1・図1に示す。図1・表1から中学生レベルの新入生が25%を占めることが分かる。また、6%は中学3年生にも満たない語彙力しかないことが分かる。さらに、全学科の最高得点は744点であり、一方最低点は434点となっており、300点以上

(平成21年10月16日受理)

¹⁾川崎医療短期大学 一般教養, ²⁾川崎医療短期大学 看護科

¹⁾Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

²⁾Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

表1 2009年度4月新入生のレベル分布

レベル	800点満点	学生総数 375(人)	百分率(%)
中1レベル	454以下	4	1.1
中2レベル	455~488	20	5.3
中3レベル	489~531	68	18.1
高1レベル	532~568	88	23.5
高2レベル	569~594	67	17.9
高3レベル	595以上	128	34.1

得点は800点満点である。得点ならびにレベルは、「日本語プレースメントテスト」を作成しているメディア教育開発センター（NIME）で定められた基準である。

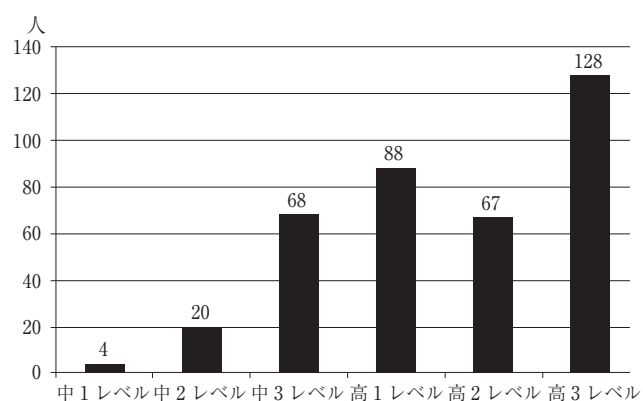


図1 2009年4月新入生のレベル分布 (全体)

の隔たりがある。次に、2007年度、2008年度入学生の入学時のプレースメントテスト結果と比較したのが、図2・表2である。2007年度入学生の語彙力において、中学生レベルは、10.7%であった。このことと比較すると、中学生レベルの学生の増加が著しいといえる。特に、2009年度入学生には、中学1年生レベルの学生が4名在籍していることから、講義等で語彙コントロール、言い換えをするなどの注意を払う必要性が高いことを示していると考ええる。一方、高校3年生レベルの学生は、34%にとどまっている。これらのことから、学生の語彙力のレベルが同一ではないと言える。

さらに、図3・表3から、B学科、C学科については、平均点が高校3年生レベルに達しており、高等学校卒業までに必要な語彙力が備わっている学生が平均的であると考えられる。A学科、D学科、E学科については、高校1年生程度の語彙力が備わっている学生が平均的であると考えられる。

これらを、2007年度、2008年度入学生と比較したものが、次の図4・表4である。2009年度の全学科の平均は2008年度より1点しか下がっておらず、ほとんど変化が見られない。しかし、A学科では、2008年度に

表2 2007年度～2009年度のレベル分布

レベル	2007年度		2008年度		2009年度	
	人	%	人	%	人	%
中1レベル	0	0	1	0.3	4	1.1
中2レベル	3	0.8	15	4.3	20	5.3
中3レベル	37	9.9	71	20.4	68	18.1
高1レベル	73	19.5	97	27.9	88	23.5
高2レベル	86	23.0	51	14.7	67	17.9
高3レベル	175	46.8	113	32.5	128	34.1
学生総数(人)	374		348		375	

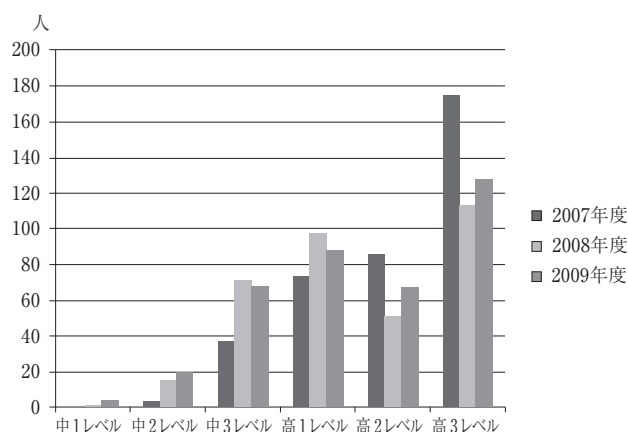


図2 2007年度・2008年度・2009年度レベル (全体)

表3 2009年度 各学科の得点分布

学 科	最高点	最低点	平均点
A	744	434	557
B	742	515	606
C	704	504	610
D	714	435	547
E	686	460	549

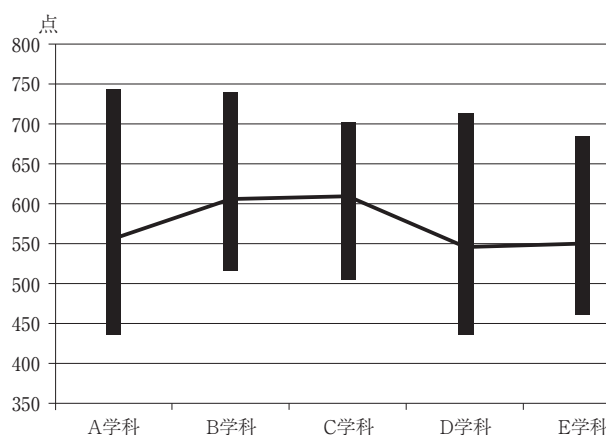


図3 2009年4月新入生の学科別分布 (全体)

表4 2007年・2008年・2009年度 各学科の平均点

学科	2007年度生	2008年度生	2009年度生
A	576	606	557
B	633	594	606
C	614	563	610
D	574	550	547
E	582	560	549
全学	596	575	574

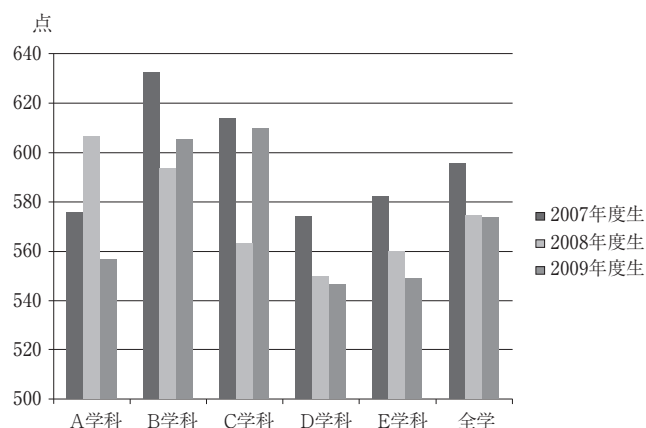


図4 2007年度・2008年度・2009年度 学科別レベル分布

比べ平均点が40点近く下降しており、D学科では3点、E学科では11点下がっている。一方、B学科では12点、C学科では46点平均点が上昇している。しかし、2007年度と比較すると、B学科では27点、C学科では4点それぞれ下がっている。したがって、全体的に得点が上昇傾向にあるとは言いがたい。

現在、学力低下の一因として、学力テストを課さない大学入試が問題視されている。学力テストを課さないことと関連性があるのかを知るために、入試区分による学科別の平均点を図5・表5に示す。

学力テストを課さない入試は、AO入試、特別入試の二つである。この図から、学科によって平均点の高い入試区分が異なっていることが分かる。特にD学科については、特別入試、推薦入試の平均点が全学科の中で最も高くなっている。B学科については、特別入試、推薦入試、一般前期入試の三つの入試区分で平均得点の幅が6点しかなく、いずれも高校3年生レベルとなっている。C学科については、推薦入試が593点と最も平均点が低くメディア教育センターが定めた高校3年生レベルに1点足りない。しかし、この他の入試区分については、すべて高校3年生レベルである。このことから、入試区分による際立った語彙力の差は見

表5 2009年度 入試区分別平均点

学 科	A O	特 別	推 薦	一般前期	一般後期
A	555	547	549	569	595
B	—	600	600	606	647
C	—	604	593	614	662
D	538	643	545	526	568
E	537	540	569	535	545

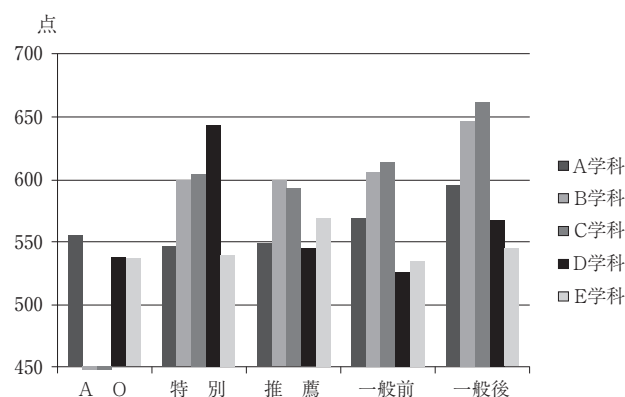


図5 2009年度入試区分別平均点

られないことが判明した。したがって、入試区分による導入教育の区別をする必要性はないと考えられる。

4. 考 察

川崎医療短期大学で実施した「日本語プレースメントテスト」の結果、高校3年生レベルに達していない新入生が半数以上を占めるという現状をどのように理解し、方策を立てていくべきなのかについて考えることが必要である。そのために、新入生の語彙力の実態を知る上で、新入生の国語に関する意識はどのようなものであるかを知る必要があると考える。以下、文化庁が平成21年に全国の16歳以上の男女3,480人を対象に日本人の国語に関する意識や理解について調査した「国語に関する世論調査」の結果から、新入生の国語に関する意識を探っていく²⁾。この調査は、大学入学時の学生の語彙力が明確に示されているものではなく、16歳から19歳という年齢幅で、調査されている。しかし、高校在学時から、大半の学生の大学入学時にかけての語彙力の背景を知ることができる上で有効であると考えられる。

調査結果によれば、16歳から19歳までの人のうち、「本を読まない」と答えたのは47.2%にのぼる。また、読書量が少なくなっている理由として、仕事や勉強が忙しく読む時間がないと答えた人が54.8%、携帯電話

やパソコン、ゲーム機などに時間が取られると答えた人が、37.8%にのぼっている。さらに、読書の必要性を強く感じると答えたのは16.7%にすぎない。このように、読書をしない、あるいは、する必要がないという認識は、語彙力の低下と関連があるのではないだろうか。

また、16歳から19歳までの人がパソコン・インターネットを利用しているのは98.6%である。利用状況について、芸能人や文化人などのホームページやブログを利用する人が49.3%、一般個人のホームページやブログを利用すると答えた人が67.6%、ホームページやブログを公開すると答えたのが40.8%で、いずれも他の世代に比べて際立って高い割合を示している。これらのホームページには、若者言葉や俗語、流行語などが多く見られ、社会人として必要な語彙力を養うことには繋がりにくいという状況があると考えられる。また、この年代が新聞から情報を得ている割合は、34.7%である。13年度に実施した同様の調査では62.8%であり、7年前に比べて半数近く減少しており、読書量の少なさと同様に、一般常識として必要な語彙力を養う上で問題であると考ええる。

新入生の語彙力の低下は、以上のような「国語に関する世論調査」に現れている生活環境の問題だけではなく、いわゆる「ゆとり教育」と深く結びついているものであると考える。例えば、小学校6年間の主要4教科の授業時間は、1971年の3,940時間から2002年度には、2,940時間に減少している。2002年度から、実質的な「ゆとり教育」の開始となっている。2002年度に小学6年生であった学生が、現在大学の入学を迎えているのである³⁾。つまり、2008年度入学生以降、小学生の時から「ゆとり教育」が開始されているのである。このことが、すでに図2、表2で示したように、2008年度と2009年度の「日本語プレースメントテスト」の結果、平均点はあまり変わっていないことと関係するのではないだろうか。

以上のことから、語彙力の低下については、学生の資質の問題よりも、語彙力を身につける学習環境が充分でなかったと言うことができよう。

語は、意志や感情の伝達だけでなく、整理・体系化された概念をもとに、高度な思考を支え促す機能がある。そして、伝達と思考によって、概念の拡充・緻密化が進められ、思考の深化が促されるという還流的作用が強化され、知的発達が促進されることになる⁴⁾。そのため、語彙力が乏しいということは、意思や感情

の伝達力が不足するだけでなく、思考の深化も疎外してしまうことになる。川崎医療短期大学を卒業後は、それぞれ対人援助の専門職を目指す新入生にとっては、このような語彙力不足による弊害は除外しなければならない問題である。また、国立国語研究所が提案しているように、医療従事者は、専門用語を一般の人にも分かるように言い換えをしていかなければ、一般の人には理解が難しいため、医療用語の説明を判りやすい語彙を用いて行っていく必要がある⁵⁾。そのためにも、語彙力を高めていくことは非常に重要である。このような問題意識を持って、新入生の語彙力の拡充に努める必要があると考える。

今年度から、語彙力を含めた日本語力を高めるための方策として、1年生前期では「日本語」の講義において『語彙力養成ドリル』⁶⁾に取り組み、1年生後期では「文章表現」の講義において新聞などを教材とした小論文の作成、読書レポートの作成などを実施している。加えて、入学前学習では「日本語プレースメントテスト」とも連動している『ことばワーク2級』⁷⁾・『ことばワーク3級』⁸⁾、「日本語検定」模擬問題を実施し、入学前学習から語彙力を含めた日本語力の必要性の喚起と学習を実施している⁹⁾。

川崎医療短期大学で平成15年度に実施した学習時間の調査では、高等学校においてほとんど家庭学習をしないと答えた学生が30%に達していた¹⁰⁾。このような状況の下、今後も入学前の自主学習から、1年生前期、1年生後期と連続して学習を進めさせる環境を整え、語彙力をはじめとした日本語力の養成に努めることが重要であると考ええる。

5. おわりに

川崎医療短期大学の2009年度の新入生は、半数以上が社会人として必要な語彙力が不足していることが判明した。このことは意思や感情の伝達不足をも招き、実習等での病院、施設の指導者、患者、利用者などとのコミュニケーションの際に不利益をこうむる、あるいは与える可能性が高い。これらの背景には、「ゆとり教育」により学習時間が減少していることに加え、携帯電話・パソコン・インターネットなどの使用頻度の上昇により、豊かな語彙力を育むのに適している環境が整っていないということがある。そのため、語彙力の伸長のためには、読書の習慣を身につけること、新聞を読むなどの入学生の自主的な取り組みだけでなく、継続した教育の必要があると考えられる。

このような状況で、「日本語プレースメントテスト」実施後の導入教育が、円滑に実施されているかどうかを測るために、「日本語プレースメントテスト」の実施結果を経年的に検討することが必要であると考え、導入教育によりどのような効果が期待できるのかについて、検討することを今後の課題としたい。

7. 文 献

- 1) 橋本美香, 山口恒夫, 下田健治, 大高正憲:「日本語プレースメントテスト」の実施結果, 川崎医療短期大学紀要28: 19-25, 2008.
- 2) 文化庁:「平成20年度『国語に関する世論調査』の結果について」http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yonchousa/h20/kekka.html, 2008.10.15.
- 3) 地球産業文化研究所地球産業文化委員会:学力の崩壊を食い止めるための教育政策に関する緊急提言:1-13, 2000.
- 4) 国立国語研究所:語彙の研究と教育(上):47-50, 1984.
- 5) 国立国語研究所「病院の言葉」委員会:病院のことばを分かりやすく工夫の提案-:勁草書房, 2009.
- 6) 宮腰 賢:実用日本語語彙ドリル3級, 旺文社, 2006.
- 7) 生涯学習検定委員会:実用日本語 語彙力養成ことばワーク2級, 旺文社, 2007.
- 8) 生涯学習検定委員会:実用日本語 語彙力養成ことばワーク3級, 旺文社, 2007.
- 9) 下田健治, 新見明子, 小郷正則, 村中 明, 片岡則之, 岡京子, 中原朋生, 橋本美香:医療・福祉系短期大学における入学前教育の現状と課題, リメディアル教育研究4-1: 12-18, 2009.
- 10) 下田健治, 名木田恵理子, 中西啓子, 村中 明, 内山克良, 山口恒夫:入学前の学習状況等に関する調査, 川崎医療短期大学紀要23:1-8, 2003.

